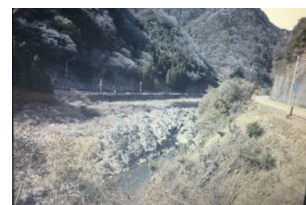


飛騨川バス転落事故バス

8月15日レポート「告白～満蒙開拓団の女たち」に書いたように、黒川村があった岐阜県加茂郡白川町にすこし暮らしたことがある。親父が国鉄の越美南線「深戸」駅から、高山線「下油井」駅に転勤した。白川町白山という住所と記憶する、下油井駅に隣接した鉄道官舎に住んだ。住んだといっても、当時は信州大2年生であり、信州松本に住んでいた。まだ学生運動にあまり関わってなく、夏休みには下油井の官舎に帰省し本を読んでいた。



そんな夏の深夜、近くで大変な事故が起こった。飛騨川バス転落事故だ。当時の写真がないので「ウィキペディア」掲載から。下油井駅舎とその周辺、バスが転落した現場の飛騨川の様子が、写真からかすかに思い出される。



『岐阜県史 通史編 続・現代』第三章「生活の変容と社会運動の変貌」から、事故について記しておきたい。事故から半世紀近く、ことしで49年になる。

1968年8月17日から18日の集中豪雨は、飛騨川下流並びに津保川流域において、多くの家屋が全半壊、流出する等、死者・行方不明14名、被害総額約56億円に及ぶ大災害となった。

この時、同時に白川町内の国道41号線において、18日2時頃、観光バス2台が飛騨川に転落する事故が発生した。飛騨川に転落したのは、乗鞍岳の観光登山に向い、豪雨のために登山を断念して引き返す途中のバスであった。ツアー参加者は「乗鞍岳雲上ファミリーパーティ」と題して募集した名古屋市内の主婦とその家族で、730人がバス15台に分乗していた。転落したバス2台からは、3人は奇跡的に救出されたものの、104名が死亡し、1か所のバス事故でこれだけの犠牲者が出たのは史上初めてのことであった。(写真は岐阜県史)



当時、台風7号くずれの湿舌に寒冷前線がゆっくりと南下、郡上、益田、加茂郡内に半径数kmの小規模で発達した雷雲が次々と発生し、豪雨をもたらした。時間最大雨量は美並村で114mm、バス転落現場近くの観測所でも、17日23時から24時の1時間に100mmを記録する驚異的な強度であった。バス転落事故行方不明者の捜索は事故後、長期にわたって行われ、事故現場から木曾川河口まで、さらには伊勢湾一帯も捜索された。

(2017年8月18日)